「南足柄市は産業クラスターと言えるのか」

21911143 小泉翔太(中庭ゼミ 3 年)

1.本研究の意義と調査方法

本研究は、神奈川県西部の神奈川県南足柄市と富士フイルムの産業集積の歴史から、本当に南足柄市が産業クラスターであるのかを検証する。

本研究では富士フイルムとアサヒビールなどの工場が立地する中心部(関本、怒田、向田、飯沢)を中心に扱い、市や企業が web や社史に掲載しているデータを中心として調査を行った。

2.研究の概要

企業城下町としての南足柄は富士フイルムがフィルム製造に欠かせない豊富な水資源を求めたことから発生した。

南足柄市の産業を扱った論文としては外枦保 大介(2012)が存在するが、工場の海外移転に伴う自治体の一例として取り上げられているにとどまる。

3.本論

今回の研究においては産業立地論において重要なことである有力な地元企業の工場が集合しているかを検証するため、各社の製品納入状況や取引先なども調査した。

南足柄市における富士フイルムの工場は製品の研究開発から生産までを一貫して行える工場を保有している。

そのため、富士フイルム自身では製造していない工作機械やフィルムを収納する缶などを付近の工場から調達している形であり、あくまでも富士フイルム自身が製造しない製品を付近の中小企業から調達しているところにとどまる。

南足柄の工業系の各社は産業クラスターを形成するにあたって重要な製品を製造する際の協業体制や技術を学び合う動きなども見られないため、あくまでも納入先を富士フイルムに依存し、経営を行ってきた形である。

4.結論

南足柄市周辺における経済を回し、雇用を創出する存在としては富士フイルムの影響が強い。中小企業であっても経済に影響力を及ぼし、企業間連携を高めていく産業クラスターの構造を目指すには現時点では力不足であると言える。

そのため、現在の南足柄市の企業群は産業クラスターとしての産業立地ではなく、地理的条件によって発生した大企業の工場周辺に集合した取引企業の小さな集合体に過ぎないと結論付けることが出来る。

5.今後

南足柄市は土地不足や他所への企業の移転、企業の経営不振による税収不足で公共サービスの削減などが進んでいる。このような状態で大企業である富士フイルムに経済を依存するのではなく、既存の地元企業の技術を活用した新たな販路の開拓や関東にとらわれずに事業を広域化するなどの対応が必要であると考える。

また、工場の立地政策も市に全てを任せるのではなく、生産活動を行う企業が主体となって進めていくことが大切であると考える。南足柄市の範囲にとらわれず、幅広く企業が展開していくことも重要であるためである。